

大地

第 29 号
2008. 8. 13. 発行
浄 國 寺
上越市 3丁目 14-10
☎025-523-5724

「骨の貯金」と「心の貯金」

山崎隆昌

小柳医師の「骨の貯金」のお話はとても面白く示唆に富んだものであった。

ドクトル小柳のお話を、私なりに乱暴に要約すると次のような内容。

「本来は若々しくまだ貯金一杯であるはずの若者や中年者の骨が、すでに貯金の残り少ない高齢者の骨のような状態にある症例が多く散見するようになった。このような状況は今後深刻な問題になるだろう(云々)」

このお話は昨年(二〇〇七年)四月、小柳みよ様の四十九日の法要の御斎の折りにお聞かせ頂いたものである。

みよ様は同年三月、享年九十九歳の長命で命終されたが、常に背筋のピンと伸びた凛とした品のある和服姿で、歯切れのよい東京弁を話された魅力的なお方であった。聞法にも熱心に務められた。小柳医師はみよ様のご長男で、日本を代表する心臓外科医あられる。

それから「骨の貯金」について僕なりに考えた。そして怠けながら今も考えている。

「骨の貯金」の無くなった原因を一言で言えば『物質文化の発達による生活習慣の変化』ということになる。

最近では生活習慣病(メタボリックシンドローム)が社会的問題になってきているが、「骨の貯金」も生活習慣病と言えるかもしれない。

このことを今少し具体的に考えてみる。一つは、車社会、ベットの使用、各種電化製品の普及、テレビやパソコン、携帯電話等生活の中で身体を動かさなくなったこと。

二つには、真の空腹感の欠如(世はグルメブームというが、本当に腹が減れば何でも旨い)、自然から離れた生活(畑で食べる生のキュウリは旨い)、家族の団欒(楽しく食べれば旨い)等、生活の中で食物を食べる習慣が変ったことがある。

このように「骨の貯金」の話は、生活の習慣(スタイル)の問題であり、おおげさに言えば生活の価値観に関わる問題となる。

さらに考えを進めるうちに、少し待てよ、「骨の貯金」と同じように、「心の貯金」も問題ではないかと、僕の中で拮がり始めた。

実際に目前に起きている社会現象は、キレる子供や若者(中高年者もか?)、家族関係の崩壊、精神病(特にうつ病)の拮がり等にみられるように、本来人々の心にあった、耐える力の衰え、ゆとりの無さ、人間関係力の希薄など、「心の貯金」が無くなってきたの

ではないかと思うのである。

「心の貯金」の無くなった原因を安直には言えないが「骨の貯金」と同じように『物質文化の発達による生活習慣の変化』ということになるか。今少し具体的に述べるならば、

一つに、自然との関わりの希薄、死との出会の場面が無くなったこと、宗教(心)との関わりの欠落等、生活の中で命にふれる機会が極端に減少したこと

二つに、兄弟・親子等の家族関係、親戚や近所の関係、遊びのゲーム化等、生活の中で人と人の関係が薄くなったこと

三つに、テレビ、パソコン、携帯電話に代表されるように、生活が猛烈なスピードと溢れる情報により成り立っていることがある。

これらの状況は、物質的な生活を便利に豊かにしたけれど、一方において心の五感(目・耳・鼻・舌・肌)を鈍化させまじさせ、心の貯金を危うくさせていると思うのだ。

それは、うがった言い方をすれば、自分が見えなくなる闇の世界(無明の闇)と言えよう。暗い闇の中で行動するために、原因のわからぬ不安、いらだち、怒り等が発生する。

高田にも在住した文学者堀口大学は詠む
深海魚ひかり遠くに住む者は

つひにまなこも失ふとあり

難しい時代にあるけれども、自らの「骨の貯金」と「心の貯金」を確かめたい。

家族の記念碑

山崎慎子

この夏九十三才を迎えた義母は、旅が大好きだった。

だった、と言ってしまふのは少し寂しくもあり、気の毒にも思うのだが、一昨身体調を崩してからは、旅をすることは殆んど無理になつてしまった。

いつの頃からか義母と私はよくあちこちに出かけた。家の事情もあり殆んどが一泊の旅ではあったが、遠くは京都や酒田、そして金沢、高山、信州と気ままな旅を楽しんだ。

最後になったのは三年前の夏、飯山にある北竜湖への旅である。家から一時間程度で行くことができ、それ迄その存在さえ知らなかった北竜湖という小さな湖の側に、一軒だけ宿があるという。

好奇心旺盛な義母は、野沢や山田といった候補地を退け、未知の所へ行きたいと希望した。

北竜湖は、飯山市街から野沢温泉に向かうちょうど中間辺りの千曲川に掛かる橋を山に向かつて登ったところにあり、宿からの眺めは絶景である。千曲川から対岸の家々の灯りを眺め、北信五山を見晴らすことができるのである。広い部屋に二人でのびのびと休み温泉に浸かつては、またまどろみ、たった一

晩ながら避暑を楽しんだという訳である。

ところで義母は、この三十年近く俳句に親しんでいた。

飯山という所は俳句の盛んな所らしく、街のあちらこちらに「投句箱」なるものが置かれていたのに気付く、母にも投句を勧めた。

旅の記念になればとの思いからである。幸い泊まった宿の一角にも箱があり、帰り際何の雑念もなく一句を投じた。

そして約一年が過ぎた九月の初め、飯山から突然の電話があった。

「睦さんの作品が第三回飯山投句大賞に選ばれました。十月九日（投句の日）に表彰式です。副賞としては、付き添いと二人温泉一泊ご招待です！」

ご本人はげげんな顔で、「私、投句なんかしたかねエ」などと言っている。次第に記憶がよみがえり、嬉しさが込み上げてくる様子。

そして十月九日、二人でまたいそいそと飯山まで馳せ参じた。会場のお寺には五十、六十人の人が集まっており、地元のケーブルテレビも取材に来てなかなか賑やかである。

会場のお寺の境内参道には、第一回と第二回の大賞の句碑が並んでいる。どちらの句も、スケールの大ききを感じさせる佳作であることが素人の私にも分かる作品である。

賞状と飯山の特産品である味噌や線香の賞品、そして何よりも嬉しい温泉一泊招待券を

頂いて、二度目の北竜湖泊りを果たしたのである。

その大賞を頂いた作品は

万緑を浪にたたんで北竜湖 睦

更に一年後、飯山の明昌寺様の境内に、句碑を建てて頂いたことを付記できるのは嬉しいことだ。句碑に刻まれた文字は、投句したときの義母の文字であることも有り難く、私たち家族にとっての記念碑にもなったのである。

俳句七句

山崎 睦

沈香の香りかすかや彼岸堂

散り残る花にも似たる我が命

トンネルを抜けて夏霧抜け切れず

今日よりは九十三才夏に処す

苦も楽も今ノ幸せ蓮の花

生も死も共に一如や盆法話

登り来て紅葉の山気ほしいまま

創作へのエネルギー

『片岡球子展』を観て

山崎隆昌

僕は現在六十三歳、間もなく高齢者（六十歳以上の人）の仲間に入る。

六十歳を過ぎたころより少しずつ自らの老を意識し始めた。僕の父は七十一歳で亡くなっている。母は九十三歳を越えても健在で、なかなか元気です。

平均寿命が八十歳を越え超高齢社会といわれる現代においてなを百歳を超えて生きることは容易なことではない。まして心身ともカクシヤクとして齢を重ねることは難しい。蓮如上人の『白骨のお文』にも「誰か百年の形體を保つべきや」と述べられている。

ところで昨年、日本画家の片岡球子が百三歳の生涯を命終されたとニュースで報じられたが、それを聞いた僕は、懐かしいような、何とも言えぬ気持ちになったことを思い出す。

今から三年前の二〇〇五年五月に『片岡球子展（一〇〇歳を記念して）』が神奈川県で開催された。またとない機会であり、新潟から僕ら夫婦と、さらに京都から娘が合流し三人で出掛けた。

JR逗子駅で下車し、駅前からタクシーに乗り海岸線を葉山に向けて走る。およそ十五分ほど、突然近代的な瀟洒な建物が目に飛び

込んできた。会場の神奈川県立近代美術館である。

タクシーの窓から見えた葉山の海岸は、同じ海岸でありながら新潟のそれとは違い、何かしら奇妙に明るい感じがしたものだ。

当時、片岡球子は百歳にして未だ現役の画家であり、そのうえ愛知県立芸術大学の客員教授として学生を指導していたという。

美術館展示場に展示されている作品は、二百号を越える大作ばかりが八十余点、さらにデッサンや下図等の小品が三十点余りで、展示会場にはゆったりとしたスペースの中

① 初期作品群

② 山と海（特に富士）を描いた作品

③ 雅楽を題材に描いた作品

④ 歴史上の人物画（面構えシリーズ）

⑤ デッサンや下図、裸婦の画群等

の各コーナーに分けられ、作品の並べ方も観やすく展示されていた。

二時間ほどかけてゆっくり回ったが、作品一つ一つから発せられる迫力に圧倒され、観終えた時には不覚にも疲れでへとへとになってしまった。

比較的写実的で穏やかな初期作品群を除き、いずれの作品も、大画面の中に大胆にデフォルメ（芸術表現）された造形と複雑で鮮やかな色彩で描かれ、その躍動的な強い個性に驚かされる。本質的に絵が放つメッセージの確

かさを改めて知らされた思いがする。

作品に付せられた作品製作の年齢を見ると七十五歳、八十九歳、九十五歳——と続くのは啞然とするのみ。全く言葉もない。

片岡球子は七十七歳を過ぎてなお、マイヨールのような彫塑作品を創りたいと考えたといい。しかし肉体的年齢的に無理であるため、新たに裸婦画による創作を始めたそうである。展示されている裸婦像の大作群の一枚は九十九歳の製作であった。

僕自身これまで幾つかの片岡作品に接し、また図録等によって、片岡球子には印象深いものを持っていたのであるが、実際に目の前にした作品群には、それまでのイメージをはるかに越える強烈なインパクトを与えられた。喜寿、米寿、白寿を越え描き出された画家の作品からほとばしり出るエネルギーは観る者を圧倒してくるのた。

片岡球子の作品に接していると「五十、六十は鼻たれ小僧」の戯言が現実味を帯びてくるから恐ろしい。

比較無理を承知で、還暦を過ぎていささか老化を感じてきた今の自分を思うと少々嫌になるが、そうだ！還暦などはまだまだ「鼻たれ小僧」なのだ。

僕は現在六十三歳、いささかとうが立った鼻たれ小僧

色濃い思い出 ―父との旅の記憶―

山崎 慎子

記憶に残っている私の人生初めての旅は、五歳の夏、父との二人旅である。

旅とはいうものの函館の伯母のお葬式に、何故か父は学齡前の私を同行したのである。

案外センチメンタルであった父は、姉の死の寂しさを紛らすべく、まだ汽車賃の要らない私を連れて行こうと考えたのであろう。しかし残念ながら、私はこの旅のことを、殆ど何もという位覚えていないのである。

酒田から函館まで、当時どれくらい時間を要したか知る由もないが、五歳の子供にはひどく退屈な、そして不安でもある長旅であった筈だ。わずかに覚えているのは、滅多にモノを買うことのない父が、途中の駅で買ってくれた一箱のアイスクリーム、そのアイスクリームの何と美味しかったことか！

その頃駅のホームには立ち売りの人がいて、首から箱を下げ「エー アイスクリン、アイスクリンは如何ですか」と呼びかけながら、列車の窓の下を、行ったり来たりしていたのである。アイスクリームは経木で作られた薄い箱に入っていて、同じように経木の小さなさじですくって食べるのである。

車中の想い出はそれだけで、あとは何も思い出すことができない。

道のりの途方もない長さ、列車の中という狭い空間、遊び相手は父一人、五人兄弟の車で賑やかに育った私にとって、汽車の進行と共に、家が段々に遠くなってゆくことが実感され、未知の土地への不安などもあり、えも言われぬ不安を募らせたことは想像に難くない。

その旅のもう一つの鮮明な思い出は、ただ泣いているばかりの私である。伯母には四、五人の子供があり、一番年下のいとこでも私より四才程上であり、大体遠い土地ということもあって、恐らくそれまで一度も会ったことなどなかったはずである。しかも場面はお葬式。

「カラスの鳴かぬ日はあっても慎子の泣かぬ日はない」とからかわれるほど泣き虫だった私に、泣くなどというのが無理な状況だったといえる。

見知らぬ土地、初めての家、次々に出入りする人々、家の中に漂う沈んだ空気等――泣いてばかりいる私に、年長の従姉が函館弁で「泣く子は好きじゃないヨ！」と告げた。気丈な従姉はその時から私の苦手な人であり、今でも気丈なままで、私にとってはそのまま苦手な人である。

その旅の復路をどのように帰ったものか、連絡船のことも海のこと、長い長い列車のことも何ひとつ覚えていない。

父はさぞ幼い私を持って余したことだろう。函館を再び訪れたのは、その時から五十年ほどを経て、老いた両親に乞われるまま、姉との四人旅を果たしたのことだった。私達も年をとり、従姉は更に年をとり、殆ど寝たきりのご亭主を抱えて、相変わらず気丈に働く人だった。

父が亡くなって、覚えていることなど無いに等しい私には、この初めての長旅が懐かしい。

私にせがまれて父は物語りなどもしてくれただろう、眠りこけた私を見守っていてもくれただろう。泣いてばかりいたことは次第にモヤがかげられたような記憶になり、父を独り占めしてアイスクリームをなめていたようなことが、鮮明な輪郭をもって色の濃い思い出になって行くのが楽しい。

後記

寺報「大地」を六年ぶりにお届けします
長期の休刊、弁解の余地もありません。
今号は夏号ということになります。
次号は秋号（十月頃？）の予定
皆様の原稿をお待ちしております。